

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：24405

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13897

研究課題名（和文）被災地の復興と大量死の現場の再建に関する集合的記憶の研究

研究課題名（英文）A Study of Collective Memory in Renascence of Disaster Areas and Regeneration of Mass Casualty Sites

研究代表者

濱田 武士（HAMADA, Takeshi）

大阪公立大学・大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員

研究者番号：60814465

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、人類がかつて経験したことがない未来に及ぶ破滅的破壊と殺戮を生み出した広島と長崎の原爆被害後に、その破壊と殺戮の傷跡に対してどのような感情と思考・認識が造られ、人々と社会が対処してきたのかを明らかにするものである。
具体的には、現在の広島平和記念公園やユネスコ世界文化遺産にも登録された原爆ドームといった原爆被害の象徴が、悪夢の傷跡として撤去、消去する意識から、犠牲者の慰霊と追憶の場へ、さらには世界に平和をもたらすための聖地へと、付与される意味が変遷してきた過程を実証的に検証してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

原爆投下や地上戦というカタストロフィ後の社会と人々の対応は、実は、例えば1995年の阪神淡路大震災や、東日本大震災の後に出来たさまざまな議論とも通底するものである。それは破滅的危機を経験した人々が、その記憶と向き合う辛い過程とも重なり合う。
現代社会に生きる人々は多くのリスクと共に生きている。そうした人々の生き方の創造のありようを広島、長崎、沖縄のカタストロフィの経験から探求することに本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify what kind of emotions, thoughts, and perceptions have been created and how people and societies have dealt with the scars of destruction and carnage after the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki, which created a future of catastrophic destruction and carnage never before experienced by humankind.
Specifically, we have empirically examined how the meaning of the symbols of the A-bomb damage, such as the Hiroshima Peace Memorial Park and the A-bomb Dome, registered as a UNESCO World Heritage site, has shifted from a consciousness of removal and erasure as nightmare scars to a place of memorial and remembrance for the victims, and then to a sacred site to bring peace to the world. The process of the transition of the meaning given to the site has been empirically verified.

研究分野：社会学

キーワード：集合的記憶 社会的忘却 災後復興 再生 保存現象 広島 長崎 沖縄

1. 研究開始当初の背景

日本社会において悲惨な出来事を後世につないでいくことは、20世紀以来の主要な関心事の一つである。その代表的なものが太平洋戦争の想起であり、毎年8月になるとテレビや新聞等で連日のように関連番組や特集記事が報じられ、全国各地では慰霊追悼行事が開催される。これに対し、21世紀に入る頃から頻繁にみられるのが、地震や水害などの自然災害を記憶する取り組みである。これは発災からほとんど間を置かずにあらわれ、様々なアクターが被災の一端をとどめる痕跡を存続させようと行動を開始する。被災者しか知りえない被害が悲痛で悲劇的であればあるほど、この試みにはひろく関心が向けられる。

本研究の出発点では、発災のたびにあらわれる保存現象に注目し、復興と記憶/忘却の関係を探ることとした。これを東日本大震災の復興祈念公園で例示すると、数多くの人びとが犠牲になった建造物や場所を公園の一部として保存することにより震災被害を記憶することが、「災害に強いまち」「震災被害の克服」などのイメージや認識を生み出して復興の後押しにつながる反面、ともすれば被害の余波に苦しむ人々への関心の低下や、被害が生じた根本的な原因究明の先送りなどの諸問題を助長し忘却に向かわせる可能性があることを指す。

もっとも、いまや保存への関心は目新しくはないものの、成長や発展の追求に価値がおかれる近現代という時代では、おびただしい死傷者や広範囲に及ぶ都市の破壊などはマイナスの経験とみなされることがほとんどであり、たとえ報道がさかんに行われようとも、実のところ実現に至るケースはわずかである。とはいえ、震災復興記念公園と同様の施設は国内外に少なからず存在し、今日ではダークツーリズムの対象として人気の観光地になっている。

本研究はこうした現代のありようを踏まえ、保存現象の進展に関して上で述べた、諸問題の忘却、という事柄を問題の中心に据えるのではなく、忘却の先にある諸問題の解消・克服までを射程に収めることを中心的な課題とした。なぜなら発災後の社会において、固有で特異な問題の数々はすでに対応がなされている場合が多いからである。本研究は保存現象がこの事実には強い関わりをもっており、たとえ諸問題の忘却に進むことがあっても、それにとどまらずあるときに諸問題に光を当てて想起の契機になることを抱えようとした。

本研究では保存現象が持つ記憶/忘却という両義性を学術的研究の俎上に載せるにあたり集合的記憶論を論じたモーリス・アルヴァックスの知見を手がかりにした。特に注目したのは、学術的価値が付与された遺跡から、一見すると取るに足らないまちの片隅にある石まで様々なモノが日常生活を構成していることに対して、それぞれの事物に意味や価値を付与する集団の存在を捉えようとする観点である。アルヴァックスによれば、集団を構成するメンバーは、自身の経験に関わりのあるモノや場所に思い入れを持っており、それらが消失に向かうような事態が生じると、普段はほとんど意識していない思いを強くして、撤去や破壊に反対するという。

この知見に基づくと、公園などに組み込まれて保存されている被災の痕跡では、思い入れを持ち、意味付けを行う被災者、被災者家族、被災者の友人、それに不特定多数の非被災者の存在を背後に見通すことができる。しかし一方で、悲惨な記憶を忘れてしまいたい被災者や犠牲者家族・友人、それに様々な理由で存続に反対する非被災者を、たとえ存在したとしても見通すことはできないことになる。本研究は、このような視点の非対称、つまり集合的記憶論において記憶ほどには忘却が考慮に入れられない部分を批判し、それによって理論構築をしようとするのではない。そうではなく、立場や意見が異なるアクターが存在するがゆえに、対立や葛藤が生じながらも、そこからいかにして意識や態度を変えながら合意や妥協に進んでいくのかを実証的に捉えようとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、太平洋戦争後の原爆投下や地上戦によって数多くの人々が犠牲になった現場が、戦後復興を通じて平和公園という形で再建された点で共通する広島、長崎、沖縄に注目し、平和の聖地がいかにしてあらわれたのかを明らかにすることである。それはローカルの場にもたらされた悲惨な出来事が、社会にとってマイナスの出来事であるにもかかわらず、なぜひろく社会に記憶されるようになるのかを問うことである。

3. 研究の方法

本研究では広島市の平和記念公園の建設とその進展に関して行ってきた研究を踏まえて、長崎と沖縄の平和公園と公園を構成する施設などを新聞資料や行政文書などの記録の収集、整理、分析により、現在に至るまでの公園建設プロセスとその後の経緯や構成要素となっている施設の設置経緯とその後に生じた出来事などの詳細を明らかにする。

以上の課題を遂行するために、広島市の広島平和記念公園、長崎市の爆心地の平和記念公園、沖縄の沖縄県営平和祈念公園を主要なフィールドとして設定し、それぞれ当該地域における現地調査を行った。長崎市は広島市の原爆ドームと並ぶ被爆遺構である浦上天主堂の廃墟が存在したが1958年に撤去された。これに代わる平和公園が都市計画においてどのように位置付けられてきたかを広島のあり方と比較するために探った。沖縄の沖縄県営平和祈念公園は戦闘地とな

った広大な敷地に建設された。公園内には資料館、慰霊碑が建設されている。この点から広島のあり方と共通する部分もあるが多くの人々が犠牲となった被災建造物などは保存されてはいないなど異なる部分もあるために詳細を探った。

4．研究成果

本研究は、人類がかつて経験したことがない未来に及ぶ破滅的破壊と殺戮を生み出した広島原爆被害後に、その破壊と殺戮の傷跡に対してどのような感情と思考・認識が造られ、人々と社会が対処してきたのかを明らかにした。具体的には、現在の広島平和記念公園やユネスコ世界文化遺産にも登録された原爆ドームといった原爆被害の象徴をはじめ長崎と沖縄の被災地が、悪夢の傷跡として撤去、消去する意識から、犠牲者の慰霊と追憶の場へ、さらには世界に平和をもたらすための聖地へと、付与される意味が変遷してきた過程を実証的に検証してきた。

こうした原爆投下や地上戦というカタストロフィ後の社会と人々の対応は、実は、例えば1995年の阪神淡路大震災や、東日本大震災の後に出てきたさまざまな議論とも通底するものであった。それは破滅的危機を経験した人々が、その記憶と向き合う辛い過程とも重なり合う。現代社会に生きる人々は多くのリスクと共に生きている。そうした人々の生き方の創造のありようを各地のカタストロフィの経験から探求することに本研究の意義がある。

2019年末からのコロナウイルス感染症拡大は、地球規模に影響し、感染症そのものはもとより、経済的安定、学校や職場におけるつながり、家族などそれまでの暮らしを破壊しグローバルな危機を生み出した。2022年2月からのウクライナ情勢もこうした危機の一つだろう。このように世界に溢れる危機の中で人々は生きている。それゆえにこそ、危機と共に生きる生き方（それは破滅的危機の象徴への対処の仕方でもある）の探求が重要になるのである。

もう一つの危機は巨大地震や巨大津波など、グローバルな気候変動とも連動したものである。こうした危機を生きるための生き方の一つは、被害の実相を示し、集合的記憶を喚起するモニュメントだが、その一つに、例えば、2020年に、東日本大震災に伴う津波被害の継承と犠牲者の追悼のために建設された宮城県の南三陸町震災復興祈念公園がある。この公園が他の復興記念公園と異なるのは、犠牲者が生まれた旧防災対策庁舎を保存している点である。こうした施設を「震災後」を作る足がかりにしているようにとれる一方、「震災遺構」は保存か撤去かの激しい議論の後に、実際には多くは時の経過とともに消失していった。しかし、犠牲者と強く関連するモノや場所の保存は、過去をたどると政治、経済、それに科学を巻き込みながら進み、いまや世界各地にみられる現象である。それは破局的危機を経験した人々が共通に編み出した生き方なのである。

本研究では広島市の広島平和記念公園及び原爆ドーム、長崎の平和公園を含む願いのゾーン・祈りのゾーン・学びのゾーン、沖縄の沖縄県営平和祈念公園をもとに、様々なアクターが被害に向き合うことで、葛藤、妥協、それに合意を重ねて慰霊や記憶をしながら災後を生み出す社会のありようの起源を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 濱田武士
2. 発表標題 負の記憶の外在化と平和公園の変容
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金太宇 前田豊 石田淳 土屋雄一郎 福田雄 濱田武士
2. 発表標題 災害廃棄物の仮置場設置に関わる要因の探索的検討
3. 学会等名 第61回環境社会学大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------